私，精神障害者 地域では普通に生きてます

広田　和子
精神医療サバイバー，保健福祉コンシューマー

Key Words　精神の病(メンタルイリノス)の教育を，一般の人の感覚，“怖い”と感じるのは人それぞれ，対等な関係が大事

「腰痛でパート勤めをしていますので…」

私は1988年，注射の副作用で29日間緊急入院しましたが，退院後40日して精神障害者の地域作業所へ通所しました。当時の近隣の人は私の副作用がひどく出ていた状態を“病気”ととらえていましたが，私も自分のことを当時よくわかりませんでした。それはインフォームドコンセントがきちんとできていなかったからです。

1989年に入ると，大家さんから「土地を返さなければならないので，引っ越ししてほしい」と言われました。私は退院後も薬を飲まなければ眠れなくなっていましたし，薬を飲んでも音がすれば眠れませんので，昨年亡くなった母と2人で引っ越し先を捜し歩きました。

当時は横浜市営地下鉄の駅から徒歩10分の家に住んでいましたが，京浜急行の弘明寺近くまで足を運びました。不動産屋さんのAさんが紹介して下さったアパートでは眠れないと思って山の上を歩いていると，小さな一軒家が空いていました。陽当たりもよさそうで，お隣の家とそれなりの距離があって，何よりも私の障害である音がすれば眠れないバリアフリーの静かさがあって“ここに住みたい”と思いました。Aさんの所へ戻って「紹介して下さった奥の一軒家が空いていたので，ぜひあそこをお借りしたい…」と言いました。Aさんは「あそこの一軒家はBさんの持ち家なので，すぐ連絡してあげるから…」と言ってくれました。

そして1989年5月3日，無事に新しい畳の入ったBさんの借家へ引っ越すことができましたが，そのときに私はAさんに「腰痛でパート勤めしかできないので生活保護制度を使って暮しています」と話しました。偏見とか差別などそんな強い考えではなくて，そこで“精神障害者の作業所へ行っています”と話すことが当時の私として家を借りる際の不利益になるかもしれないと考えたからですが，この作戦は成功しました。

「あの人がこわい！」

1989年の7月1日から11月末日まで，私は作業所へ出入りしていた零細企業でミシンを使って縫製の仕事をしていました。そのときに作業所のほかの仲間2人も一緒に働いていました。

毎日，3時に他のパートの中年女性2人とお茶を飲みながら，楽しいひとときをすごしていました。ある日，社長がいて，「ところで3人は，なんで精神科病院へ通院しているの？」と聞かれましたので，私は「眠くならないのが主な状況です」と答えますと，社長は「疲れても眠くならないの？」と聞かれました。私は「逆に疲れすぎてしまうと薬を飲んでもなかなか眠くならないんですよ」と答えました。社長は「そんなものなのか」と驚いていました。仲間が「私はうつからくる頭痛持ちで薬を飲んでいます」と話すと，このことは社長もパートの人も納得できたようです。

ところがもう1人の仲間が「私は幻聴があります」と答えると社長は「幻聴ってどんなこと？」と聞きました。仲間が「実際にない声が頭の中から聞こえてくるのです」と答えました。社長は「どんな声が聞こえてくるの？」と聞き返しました。仲間は「たとえば地下鉄のホームに立っていて，電車が入ってくると“いまだ！ 飛び込め！”とか聞こえてくるのです」と答えました。社長は「それでどうするの？」と聞きましたら，仲間は「イヤ。俺は飛び込まないぞ！　と心の中で幻聴に言い返します」と答えました。社長は幻聴に関

心を持ったらしく「ほかにはどんなことが聞こえるの？」と聞きました。仲間は「おまえはバカだ！　という幻聴が聞こえると，心の中で“バカじゃない”と言い返しています」と答えました。

社長はその後，何も言いませんでしたが，ある日パートの女性が私しかいないときに「ねえ。広田さん！　こないだ幻聴の話を聞いてから○○さんが，あの人（幻聴の人）と一緒に仕事をしているのが“怖い”と言っているのよ」としんみり語りました。「怖いといってもご本人は幻聴を自覚されていて，一生懸命幻聴と闘っているわけですから，とても辛くて，大変なんですよ。それにご本人と会ってもう3カ月，一緒に仕事して温和な人柄も理解していただいているじゃないですか」と私は言いました。パートさんは「私はこうして広田さんに話しているわけだから理解しているけれど，彼女（もう1人のパートさん）は娘さんが精神障害者作業所の指導員志望だったけれど反対してやめさせたそうよ。幻聴の話を聞いたので…」と言いました。

親が幻聴が怖いと思ったからといって，娘さんの人生まで左右していいのだろうかという思いがいまでも心の底にあります。しかしこの体験について，これは差別や偏見ではないと私は考えています。人それぞれ“怖い”と感じる感覚は独自だからです。ゴキブリを紙でつかまえて捨てる広田和子もいれば“ゴキブリが怖くて！”と悲鳴をあげて逃げ回っている友人もいるからです。

「そこが，あんたの障害だ」

ミシンの仕事が終わって，約2カ月して今度は作業所から徒歩3分の所にある電材会社でパート勤めを始めました。面接のとき，社長は「広田君は作業所から来たので時給は500円，仕事ができたら時給は上げます。その代わり，仕事ができなかったらやめてもらいます」とシビアに言われました。私はこのようにストレートに言われるのが好きな人間です。C社長は，私が仕事を始めてしばらくすると「広田君のような人にほかにも何人か働いてほしい」と作業所へ電話したとかで，作業所のスタッフは「広田さんのような人は広田さんしかいません」と断わったそうです。

そして社長は面接のときの公約どおり「広田君！　あなたの仕事ぶりは一般の人と同じなので，イヤむしろ○○さんたちよりあなたのほうが仕事ができていると私は思っている。時給を上げようと思うけど生活保護との関係はどうなるの？」と聞いてくれました。私は「それはありがとうございます。時給が上がれば生活保護からお金が減りますが，外部から見たときに，C社長が障害者を安い賃金で働かせているのではなくて，労働に見合ったお金を払っているという評価になると思います」と私は答えました。

しかしC社長は仕事に厳しい人で，私がミスをすると，他のパートさんたちの前で「広田君！　そこがあんたの障害だ！」と大声で言いました。社長もミスをすることもあり，そのようなときには「社長！　精神障害者も大変ですが，零細企業の経営者も大変ですね！」と私が言いながら社長の肩に手を置くと，社長は「わかってくれるか広田君！」と笑いながら言いました。

他のパートさんたちは，その2人のやりとりに笑っていて，社長，パートさん，私という3者の関係は人として対等でした。この体験はとても重要で，精神医療および保健福祉関係者との温度差をいまでも感じています。

パートさんたちと同じに働けたといっても毎日11錠の薬を飲んでいるわけですから，それは大変でした。そこである日，社長が主任と私を残業後にお寿司屋さんへ連れて行ってくれたときに「社長！　毎日これだけの薬を飲んでいますので，朝が大変なんですよ」と私が言いました。社長は「わかった。広田君！　明日から出勤時間を一時間遅くしていいから」と言ってくれました。こうしたやさしい理解力と仕事中の厳しさの中での社長と私との相方のユーモアはありがたかったといまでも感謝しています。

1992年に日本のバブル景気がこわれ始め，C社長に心の余裕がなくなってきました。そんなある夜，社長と主任と私の3人が仕事をしていたときに主任が「社長！　○○君がてんかんを起こしてたおれても保証しないという念書を取っておいたほうがいいですよ」と大声で言いました。この言葉を聞いて“ああ！　○○君は他人事ではない。

私自身のことでもある。私はたおれる前にこの会社をやめよう”と決心しました。C社長は私の心を見抜いて，「広田君！　会社をやめるのか？」と聞きました。私は「正直言ってやめようと考えています」と答えました。C社長は「そうか。広田君はやめるんだな」と言って口をつぐみました。私は次の仕事を見つけてやめようとしていましたら，社長は「広田君！　いつやめてもいいんだぞ」と言ってくれました。

そこで私は新聞の折り込みを見てスウェーデンのエレクトロラックスという会社の横浜支店でアポインターを募集していましたので，昔，営業の仕事を8年間くらいしていたこともありましてC社を休み面接に行こうと思って社長に「休暇を下さい」とお願いしたところ，社長のOKが取れました。

「私は精神障害者です」

エレクトロラックスの面接はD所長との出会いでした。開口一番に「私は精神障害者です」と名乗りました。D所長は「精神障害者かどうかは関係ありません。責任を持って仕事をして下さればいいのです」と答えました。「責任を持って働かさせていただきますが，2週間に一度精神科病院に通院しますので，その日の出勤は午後2時頃になりますし，ふだんも多量の薬を飲んでいますので，出勤時間をみなさんより遅くしていただきたいのですが」と私は言いました。D所長は「いいですよ。あなたの話し方は電話でお客様と接するアポインターに向いていますよ。ところでいつから働けるのですか？」と聞かれ，私は「まだ，他の会社に在職中ですので」と答えました。D所長は「そうですか。うちとしてはあなたのような人でしたら一日も早く来ていただきたい」と言われましたので，私は「わかりました。実は同じ職種で生命保険会社等では時給が1,500円で，こちらは700円でしたが，スウェーデンの会社ですので，スウェーデンは福祉の先進国ですのでこちらへ伺いました」と言いました。

翌日，C社長は「広田君！　面接に行ってきたのだろ。相手はなんて言っていたんだ？」と聞かれましたので，私は「はい。『すぐ来てほしい』ということでした」と率直に答えました。C社長は「そうか。じゃー！　明日から行きなさい」と言って下さったので，私は「社長！　本当にいろいろお世話様になりました。○○君には怒鳴らないで下さい。あの子は私と違って怒鳴られると，てんかんで倒れてしまいますので」と答えました。その間に，私はC社のことを“野麦峠”と名付け「広田さん！　もうC社をやめたほうがいいんじゃないですか」とアドバイスして下さった人もいましたが，私は何度も“ここでやめたら「やっぱり精神障害者はだめだ」と思われたくない”と思っていました。しかしバブル景気のはじけと，この大変な中で丸2年間，やれることはやったのでC社に別れを告げてエレクトロラックス社での仕事が始まりました。

ところが午前10時に出勤してお茶を飲みいざ電話をかけ始めたら，舌がもつれて話しをすることができません。そこで翌日に通院して主治医に話したところ「それは広田さんが飲んでいる薬の作用です。そうやって強い薬で眠らせているのですよ」と言われました。舌が午前中回らないということはD所長にも言えませんので，私は翌日から「実は保健所から電話がありましたので…午後から出勤します」というような電話を入れて，いつしかフレックスタイムのような勤務になりました。

それでも全国平均よりアポを取り，所長とアポインターとのミーティングでは先輩の人たちから「広田さんは発言が上手だから私たちの分もまとめて質問して」と言われていました。隣の席の人に「精神科病院で医療ミスの注射を打たれて鍵と鉄格子の中に入院して…」と話したところ，「あなたはなぜそのときに医療裁判を起こさなかったの？」と聞かれました。これが一般人の感覚です。

「精神障害者ってなんなの？」

一日400本平均アポインターとして電話をかけていて社会がよく見えましたが，1993年3月25日に交通事故にあい，それを機会にサバイバーとして業界の人間になりました。業界とは精神障害者をとりまく医療や保健福祉や行政に携わる人々のことです。業界人は本人，家族も含めて「世間

の偏見や差別」をしょっちゅう口にします。が…。

1999年8月に私は山の上の一軒家から徒歩数分の所にある山のふもとの一軒家に引っ越ししました。そのときに私の障害をクリアするには生活保護から出る家賃内で家をさがせなかったので“横浜市精神障害者住み替え住宅制度”を利用しました。

不動産屋さんのAさんにはその3，4年前に「最初に会ったときには言わなかったけれど，私，精神障害者です」と言ったところ，「あら，そうだったの。最初に会ったときのあなたはボーッとしていたけど，その後，会うたびに活気が出てきてたのよね」とAさんは言いました。私は「お会いした前の年に精神科病院で注射を打たれて，それでボーッとしていたのですよ」と私は答えました。Aさんは「だったら医療ミスじゃない」と言いました。私は「そうなんですよ。それで鍵と鉄格子のある閉鎖病棟という所に入院したのですが，精神科病院は診療報酬も安くて人手も少ないので，鍵や鉄格子があるのですよ。中の人が危険なわけではなくて，むしろ中の人の自殺防止の役割をしているのですよ。退院先のない人もたくさんいます」と言いました。Aさんは「あら，そうだったの。外から見ると鉄格子はなんだか怖い感じがしていたけれどね」と言いました。この怖い感じが場合によって偏見につながるのでしょう。

しかしその鉄格子のある病棟に入っている人も精神障害者だと知っている国民はいないといっていいほど，何も知りません。私は“偏見だ，差別だ”と私たちが言えば言うほど，相手は引いてしまうと思います。

私はサバイバー（生還者）として，多機関での活動とともに自宅でも相談やショートステイを引き受けています。その関係で“近所の交番勤務者”には大変お世話になっています。そして相談者たちや仲間たちと近所の“お寿司とちゃんこ鍋”屋さんにもよく行きます。あるとき，そこの社長ご夫婦が「ところで広田さんは，よくお客さんを連れてきてくれるけど，何をしている人なの？」と質問しました。私は「精神障害者なのよ」と答えると，奥さんが「精神障害者ってなんなの？」と質問しました。私は「精神の病で心療内科や神経科や精神科に入院している34万人の患者と183万人の通院患者のことなのよ。つまり日本の総人口の56人に1人（3年前当時）ということなの」と答えました。奥さんは，奥から薬を持ってきて「ねえ。広田さん！　私，ゴルフに行く前の晩に眠れないのでこの安定剤を○○からもらって飲んでいるけど大丈夫かしら？」と聞きました。私は「薬剤師でも医師でもないのでわからないけど，1晩眠れないのは病じゃないのよ。毎日眠れないのが精神の病なのよ」とレクチャーしました。

おわりに

私が説明したくらいのことは中学や高校の保健体育の教科書に入れることが大事だと思います。また，病名変更は，本人に告知せず年老いた親に「実は息子さんには自律神経失調症と言ってありますが，お母さん！　本当は精神分裂病（統合失調症）なんですよ」等と医師が言うことが多かったので，全家連が運動を起こしたのだと私は多くの家族からの相談を受けて感じています。

ある意味で分裂病という病名にいちばん偏見があったのは精神科医ご自身方々だと私はとらえています。精神科医が患者と向き合う際にきちんとしたインフォームドコンセントをしていただきたいと希望します。

単に病名を告知するのではなくて，なんのための注射なのか，なんのための薬なのかということをわかりやすく，そして将来に希望を持てるようにていねいにインフォームドしていただき，本人の言葉でコンセントを聞いていただきたいのです。

仲間の中には「主治医が変わったら病名が変わった」という人が大勢います。私自身もかつての主治医が私のことで悩み，多くの医師に相談したところ，「ある医師は精神分裂病といい，ある医師は躁うつ病といい，ある医師は非定型精神病といい，ある医師は思春期症候群か思秋期症候群ではないかといい，また，ある医師は『いまが広田さんにとって人生の危機で病気ではないのではないか』」と意見がたくさんあったことを病院関係者から聞きました。つまり精神の病は医師の判断により，意見が分かれることが多々あります。それはガンのように細胞があったり，エイズのよう

にウイルスがあるわけではないからです。何も精神分裂病を病名変更するより，精神の病，メンタルイリノスでいいのではないかと思います。

こうした話を，私は昨年10月“精神分裂病に対する偏見と差別をなくすための拡大委員会委員”として発言する機会に恵まれました。その日，私の発言に対して委員会のスポンサーであったイーライリリー社の社長は「ユーアートラブルメーカー」と率直に言っておられました。

この文章が皆様のお手元に届くころ“世界精神医学会”の話題はすでに過去のものとなっているでしょうが，学会開会中に開催された“精神障害者に対する偏見と差別をなくすための市民公開フォーラム”（主催：世界精神医学会，日本精神神経学会，統合失調症に対する偏見と差別をなくすための特別委員会および拡大委員会）がありました。

拡大委員の私はフォーラムで発言した当事者の人選を含めて何も知らされませんでした。私は委員だからシンポジストに招かれるべきだと思っているわけではありませんが，製薬会社のこの業界の影響力を肌で感じる思いがしました。そして，場合によっては委員としてこのようにアリバイ作りのような使われ方をすると，患者はつぶされてしまうと感じました。同時に私自身，よほど自分を見失わないように気を引き締めていないと，もしかしたら行政や専門職やスポンサー好みの発言をする患者になってしまう危険性を感じました。今回のことを教訓にして自らのポリシーを失わず，社会的入院者を含めた誰もが安心してどこでも暮せる地域づくりを目指して，これからも命がけで活動していきたいとあらためて痛感しました。